

「廃校と学校キャンプを活用した地域活性化プロジェクト～生まれてよかった 住んで良かった 訪ねてよかった 都万 隠岐の島町をめざして～」

隠岐の島町立都万公民館

## 1 隠岐の島町都万地区の概要

(1)隠岐の島町は、隠岐諸島島後の1町3村が平成16年10月に合併し「隠岐の島町」となった。

平成30年10月現在の人口は14,341人であり、都万地区の人口は1,633人である。

(2)都万公民館は、都万保育所、都万小学校、都万中学校から歩いて数分の位置にあり、隠岐の島町都万支所、都万診療所と隣接している。

(3)地域の産業は、半農半漁の地域であり、白砂青松百選に選ばれた「屋那の松原」や、日本の滝百選に選ばれた「壇鏡の滝」は観光資源として、観光客も訪れる。近年は、ダイビングスポットとしても注目を集めている。事業所は、西郷地区へ集中立地しているため、自家用車で通勤している者が多い。

## 2 事業の趣旨

(1)都万西部地区は、かつて「那久学園」と呼ばれた小中学校併設の教育施設を中心に栄えていた地域である。小学校の校舎が老朽化した折には、地域の強い要望で新校舎を建設したり、児童数の減少にもいち早く対応し、山村留学を受け入れたりして、地域が一つになってその時代時代の課題に取り組んで来た。しかし、町村の合併や少子超高齢化、そして平成22年の那久小学校廃校などの影響を受け、地域が子どもたちと触れ合う機会を失い、地域が自ら課題を解決していこうとする意欲も失われつつあるように見受けられる。

(2)昨年は、「しまねのめざす『地域力』醸成プロジェクト」の「ふるさと体験活動モデル事業」に取り組んだ。廃校となった学校を活かし、ふるさとの良さを再発見するキ

ャンプを小学校や中学校が行うことを通して、地域の住民の皆さんは、子どもたちに教える楽しさを味わい、旧那久小学校への想いも募らせ、もっと何かしてあげたいという意欲を高めた。これは、子どもたちが活動する地域の良さを再発見にもつながり、継続意欲も高まっている。

(3)今年度は、この機運を生かし、更に地域のリーダー育成や学校や地域と連携ができる人材を発掘・育成していくことで、継続展開しながら継続発展し、地域活力の回復を図っていきたく考えた。

更には、日本中の小中学生を受け入れるなど、教育産業としていくことも視野に入れ、地域に大きな夢を持たせながら、公民館が中心となって支援し、子どもの縁をもとに、「こころざしの縁」をめざした。

## 3 具体的な取組内容

(1)今年度から、新たな運営体制としてふるさとキャンプ実行委員会を立ち上げ、学校、関係区長、関係諸機関の協議の場を設け、ねらいを共有し、活動内容を吟味した。

(2)まず5月に都万西部地区5区長、地域おこし協力隊、教育委員会、役場都万支所、都万公民館が参加した都万西部地区区長会が開催された。その中で公民館も、活動計画の説明をした。

(3)また6月には、公民館が事前に小学校、中学校と別々に打ち合わせ会を設定し、目的やねらい、活動内容を協議した。

(4)その後、第1回ふるさとキャンプ実行委員会を開催し、学校のねらいや活動内容の希望を聞き、地域に協力を依頼した。併せて雨天時のプログラムについての協議も行った。さらに地域の思いも聞く場となり、

地域と学校が連携、そして協働へとより関係を深めた。

(5)旧那久小学校の校庭や中庭は普段使われていないため雑草が生い茂っていた。このままでは活動ができないため、地域の皆さん、学校の先生、役場職員、公民館職員が協力して、活動のフィールドとなる旧那久小学校の環境整備を行った。今年度は地域の小中学生も参加しキャンプ前から気持ちが高まった。

#### (6)特色ある地域の方々との交流活動

都万小学校の特色ある取組として、海水浴・サザエ採りが挙げられる。普段は漁業権や地先権で組合員以外の採取はできないが、地域の特別な計らいによりサザエ採りを実施することができた。地元の漁師さん2名に監視艇を出して頂いた。児童がおぼれかけ、監視の漁師さんが海に飛び込み救助する場面があった。地域の方の見守りの有難さ、専門的緊急対応の良さを感じた。

都万中学校のシーカヤック体験は、台風接近のため実施があやぶまれたが、嵐の前の静けさの中、予定通り実施することができた。生徒たちが乗った2人乗りシーカヤックは、4隻の伴走船が見守る中、日本海の外海へと漕ぎだした。2時間ほどの体験であったが、生徒たちにとって自分の力で大海原へ漕ぎ出すことは冒険であり、完走した充実感は格別なものであった。

(7)ふるさとキャンプの終了後、振り返りのため、第2回目の実行委員会を開催した。その場で、区長さんから「学校から子どもの声が聞こえることがうれしい」ことや、「このような交流の大切さ」について、さらに「普段から那久小学校を使うことができれば」との発言があった。また学校からも「中学生の約半数の生徒が今回のキャンプのために水中メガネやシュノーケル等を買ってもらった」との話があり、隠岐の子でありながらも海での体験活動が少ない現

実が明らかになった。また「海での活動なので監視艇があつて良かった」ことや「旧那久小学校が使えて良かった」との意見もあった。さらに「今年のキャンプはかかわりが増え交流が深まった」との意見や小学校からは、「中学校が積極的に地域の方々と交流している様子が分かった。小学校も地域の方々と交流を増やすよう検討したい」との意見があった。地域もこのキャンプを望んでおり、小中学校も来年度の実施を希望している。

#### 4 評価と成果

児童、生徒が、豊かな都万の自然に親しみ、普段あまりできない様々な体験をすることで、ふるさと都万の良さ再発見し、さらに郷土を愛する心を深めた。

また地域のゲートボールやロープワークを教える方々が子どもたちとの交流を楽しみにし、熱心に教えておられる姿が見られ、これらの交流活動が高齢者に元気を与える活動になっていた。

また、地域にとっても学校にとっても、人と人とのつながりができたことがこの事業の大きな成果である。こうした機会があつてこそ新しい絆が生まれ、更なる発展へとつながっていくと考える。地域の宝である「ひと」「もの」「こと」を再発見することにつながった。

#### 5 今後の課題と見通し

今年度から、事業の持続可能な体制づくりを進めるため、ふるさとキャンプ実行委員会を立ち上げた。その場で地域の思いや改善案なども語られるようになり、より一層、学校との連携・協働へとつながっていくと思われる。また、会の中では、都万支所との連携も求められた。課題解決にひとつひとつ丁寧に取り組みながら、地域に活力を取り戻すよう粘り強く取り組んでいきたいと思う。

(文責：館長 日下祐志)